

# TOPICS OF GI

## 消化器疾患のトピックス

### 企画



#### 藤本一眞

佐賀大学医学部内科学 教授  
(本誌「TOPICS OF GI」コーディネーター)

今回の消化器疾患のトピックスは、東京医科大学病院消化器内科主任教授の糸井隆夫先生に依頼した。日本消化器内視鏡学会で作成された診療ガイドラインである内視鏡的乳頭括約筋切開術（EST）と内視鏡的乳頭ラージバルーン拡張術（EPLBD）について、診療ガイドラインの作成過程や内容を中心にまとめていただいた。これらの処置は消化器内視鏡技術の進展とともに、急速に発展した方法であり、かつては手術が必要であった症例の多くが内視鏡的処置で対応可能になった。内視鏡的処置に伴う急性膵炎などの重篤な偶発症も問題となっており、偶発症への対応を含めた診療ガイドラインの作成が急務であった。今回、作成された診療ガイドラインは、日本消化器内視鏡学会雑誌（Gastroenterological Endoscopy）と日本消化器内視鏡学会の英文誌である Digestive Endoscopy に掲載されている。同学会のホームページでも公開されており、今後広く臨床診療の指針となるガイドラインである。

### 第28回

# EST, EPLBD 診療ガイドライン

糸井隆夫\* 良沢昭銘\*\*

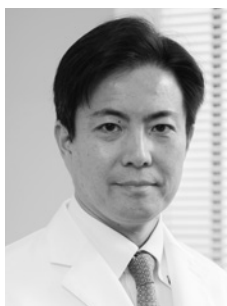
東京医科大学病院消化器内科主任教授\*  
埼玉医科大学国際医療センター消化器内科教授\*\*

### はじめに

内視鏡的乳頭括約筋切開術（endoscopic sphincterotomy：EST）は45年前にKawai, 相馬, Classenらにより開発された内視鏡的逆行性胆管膵管造影（endoscopic retrograde cholangiopancreatography：ERCP）関連手技である<sup>1)</sup>。当初の外科的胆管結石治療後の遺残結石に対して乳頭の胆管開口部を広げて結石の自然排石を促すのが目的であったが、今日では引き続き結石除去用の処置具の進歩に伴い、総胆管結石に対する乳頭処置の標準手技となっている。

一方、内視鏡的乳頭ラージバルーン拡張術（endoscopic papillary large balloon dilation：EPLBD）はErsozらにより2003年に報告された総胆管結石に対する比較的新しい乳頭処置手技である<sup>2)</sup>。従来ESTのみでは結石除去が困難であった大結石などに対して、EST後に径12mm以上のラージバルーンによりさらに胆管開口部を広げることで結石除去を容易にする画期的な方法である。

これらEST, EPLBDともにERCP関連手技として重要な手技であるが、一方でERCP関連手技は術後膵炎など予期し得ない偶発症が起こりうることも知られている。今回、日本消化器内視鏡学会として藤本一眞ガイドライン委員長のもと、ESTとEPLBDを安全に施行するために診療ガイドライン委員会（委員長：EST；良沢昭銘, EPLBD；糸井隆夫）を設置し、わが国で初めてのEST診療ガイドライン<sup>1)</sup>およびEPLBD診療ガイドライン<sup>2)</sup>が作成された。これまでのわが国において作成されたガイドラインは、専門家の経験と知識に基づき執筆され、現在国際的に標準とされているevidence based medicine（EBM）の手順に則って作成されたものではなかった。そこで本診療ガイド



### PROFILE (筆頭著者)

#### Takao Itoi

いとい・たかお ●1991年東京医科大学卒業後、東京医科大学内科学第4講座（現、消化器内科）入局および同大学院入学。1992～1995年新潟大学病理学第一教室（渡辺英伸教授）に研究出張。帰院後、講師、准教授を経て2016年7月より現職。その他、東京医科歯科大学消化器内科および慶應義塾大学消化器内科客員教授も兼任。